

であられたので、その内心の美術観を以て人に強請されなかつた。しかし、今日、本書のごとき纏れる美術史論文集として、その永年の鑑賞生活がうかゞひうる機会をあたへられるとき、私には、博士の理想境には日本古典美術が中心となつてゐたと考へられる。そして、そのことは後身の吾々にも消しがたい教訓となつてゐなければならぬものである。

〔長廣敏雄〕

東洋讀史地圖

箭内互編
和田清補

故箭内互博士の「東洋讀史地圖」は大正元年に刊行せられ、以來編者の補訂を重ねて大正十四年第四版を出すに至つた。その後不幸にして博士は逝去せられたので自然改訂の機会なく、そのまゝに世に行はれたのであるが、この度該圖編纂に關する故博士の抱負なり苦心なりを知悉してゐる和田清博士が該圖に増訂を加へ、面目を一新して發刊したのが本圖である。

元來これは、從來の歴史地圖が専ら支那本部の沿革に限られたものであるのに不満を懐いた故博士が、支那民族の建てた國家の沿革はもとより、その周圍の民族の盛衰興亡にも意を用ひ、これを眞の意味での東洋歴史地圖たらしめようといふ意圖の下に編まれたものであつて、當時劃期的な名著であつたことは言を俟たない。しかし故博士は、多少の疑あるものは凡て省いて記入せず、又標準年代を非常に嚴密にした、めに、大體な圖面の大半が空白

で見えるものに空疏な感じともにもつたないといふ感じさへ與へたのである。此度和田博士の増訂によつて、菊倍判は四六倍判の手頃な型に改められたのと、利用者之の便利を考へて標準年代に幅をもたせたのとで、よほど空疏な感じが緩和せられた上に、事實圖面も博士の手により、少きものも十數箇所増訂を經、中には著しく面目を改めたものや、全然書き改めたり、新たに挿入したものもある。かくて再版の誤謬が正され、不足が補はれ、現在の最高水準をゆく東洋歴史地圖として再生したことは、ひとり故博士のためばかりでなく、學界のために喜びに堪へない。

その内容を見ると、巻首に支那古地圖として禹跡圖、華夷圖及び清内府一統輿地祕圖、ダンヅェル支那新圖の各一葉を掲げ、以下

- 一 禹貢九州圖、二 春秋時代要地圖、三 戰國時代亞細亞形勢圖(附圖、佛教興起以前印度圖、佛教興起以後印度圖、摩揭陀地方圖)
- 四 戰國七雄圖(附圖、周及韓)、五 秦一統圖、漢初封建圖、六 前漢十三部一百七郡國圖、七 前漢武帝時代亞細亞形勢圖(附圖、敦煌附近長城遺蹟圖、朝鮮及三韓圖)、八 後漢時代亞細亞形勢圖(附圖、漢室復興時群雄割據圖、十番初亞細亞形勢圖)
- 五 胡興亡圖、共一石勒稱帝、第二肥水會戰、第三肥水戰後、十一 東晉時代之滯洲及朝鮮、十二 南北朝時代亞細亞形勢圖(附圖、南北朝末期四國分立圖、法顯三藏印度旅行圖)、十三 隋代亞細亞形勢圖(附圖、隋末唐初群雄割據圖)、十四 唐初亞細亞形勢圖(附圖、唐長安城坊圖、唐代海上交通圖)、十五 唐代之滯洲及朝鮮、

十六五代時代亞細亞形勢圖(附圖、燕雲十六州及其附近)、十七宋金對立時代亞細亞形勢圖(附圖、金宋夏三國末年要地圖)、十八元初亞細亞形勢圖(附圖、元末群雄割據圖)、十九元代之朝鮮(半島)、二十明初亞細亞形勢圖(附圖、明初南海要地圖)、廿一歐人新地檢出時代圖、廿二李氏朝鮮、廿三明末亞細亞形勢圖(附圖、清太祖時代之滿洲)、廿四清初亞細亞形勢圖、廿五露國之亞細亞侵略、廿六英國之印度侵略(其一總督別、其二代別)、廿七清末廢亂圖、清末外國關係圖(遼東半島、膠州灣、威海衛、印藏界約、伊犁附近、香港及澳門、廣州灣、廿八日清日露兩戰役圖(附圖、日露戰役奉天會戰圖、日露戰役旅順要塞圖、日露戰役日本海大海戰圖)、廿九清末亞細亞形勢圖、三十清末支那全圖(附圖、清代北京圖、北京富國圖)、卅一西北利亞出兵及滿洲事變圖(附圖日獨戰役概見圖、青島要塞戰圖)、卅二現代亞細亞形勢圖、卅三現代東亞要圖(附圖、南京市街圖、上海市街圖、新安市街圖) *印は新たに加へたるもの * *印は改訂の著しいもの * * *は全然書き改めたもの。

の諸圖を掲げ、卷末に六四頁よりなる東洋讀史地圖解説を附けてゐるが、これも再版を増訂する所が少くない。

古代から現今に至るまでの歴史地圖であるから、これを批判することは到底私にはできない。たゞ開卷第一に氣がつくのは、自説に關することで恐縮であるが、卷首支那古地圖の内、現存の支那古地圖中最古のものと考へられる、齊阜昌の禹跡圖と華夷圖の年代が 1137 A. D. となつてゐることである。解説の禹跡圖の部

分にも、この圖碑が建てられた齊の阜昌七年は金の熙宗の天會十五年、南宋の紹興七年、西曆一一三七年に當るとある。拙稿「劉豫の齊國を中心として觀たる金宋交渉」(『滿蒙史論叢書第一』一〇八頁補註 47)に於て試みた考證によれば、齊阜昌七年は金の熙宗の天會十四年、南宋の高宗の紹興六年、西曆一一三六年に相當する筈である。しかしこれは地圖の内容に關したことはない。

我々が座右に置いて始終その御厄介になるのは年表と地圖とであるが、我々はその恩になれすぎて、兎角その缺點を擧げてその便利な點を忘れ勝ちになる。本圖なども或はさういふ取扱をうけるもの、一つとなるかも知れない。私は缺點を擧げるのは悪いこととは言はないが、そのよい一面を忘れてはならないと思ふのである。多くの利用者をもつであらう本圖は、各方面の研究の進歩と、もに將來ますます成長を遂げるであらう。専門家の忠告は、和田博士の歡迎せられるところであることは、その序文に於ても言つてみられる通りである。他人のものを改訂することは、初めから書き下すよりもむづかしい。これは本圖増訂に當つて和田博士の痛感せられたこと、察せられるが、さうした憚みを該圖隨處に感ずるのは私一人ではあるまい。和田博士の勞を深く謝したいと思ふ。(昭和十六年一月、富山房發行、四六倍判、定價七圓五〇錢)(外山軍治)

東亞古文化研究

原田淑人 著